



国指定史跡

浦尻貝塚

urajiri shellmound



海と森にかこまれた浦尻貝塚



空から見た浦尻貝塚



南相馬市の位置



浦尻貝塚の位置

南相馬市は、福島県の太平洋側にあたる浜通り地方の北側に位置します。平成18年1月に原町市、鹿島町、小高町の1市2町が合併して誕生しました。面積はおよそ399平方キロメートル、東には太平洋が広がり、西に標高500mを測る阿武隈山地がそびえています。浦尻貝塚は、南相馬市の南端、小高区浦尻にあります。

浦

尻貝塚は東側に太平洋を望みます。標高25～28メートルの高台にあります。高台とその斜面が縄文時代の遺跡の範囲にあたり、広さは福岡ドームとほぼ同じ、およそ70,000平方メートルにも及びます。

周辺には、高台を中心に緑豊かな森が広がり、高台のまわりの小さな谷に川の水も流れています。

また、明治時代までは浦尻貝塚の北側に「井田川浦」という陸地に入り込んだ東西1.8、南北1キロメートルの大きな海が広がっていました。この海は、川と海の水が混じりあい、太平洋とは異なる環境でした。このように、浦尻貝塚は海から森までさまざまな自然環境が接する場所にありました。

浦尻貝塚周辺では、浦尻貝塚のほかにも北原貝塚遺跡群など、縄文時代の前期から晩期の遺跡が1平方キロメートルで見つかり、自然資源を盛んに利用していた縄文時代には、この地域が恵まれた場所であったことがうかがえます。

縄文時代のタイムスケール

縄文時代は「狩り」「魚とり」「木の実ひろい」を主な『なりわい』とし、本格的な稲作を行っていませんでした。



浦尻貝塚周辺のようす

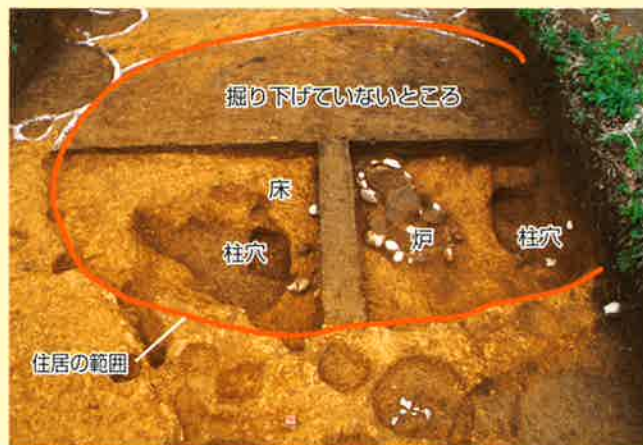
浦尻ムラのすがた

平成 13～16 (2001～04) 年の調査で、浦尻貝塚は縄文時代の前期後半から晩期の中ごろ (およそ 5,700～2,800 年前) という大変長い期間営まれたムラであることがわかりました。

高台の平坦面にあたる南台地区の北側部分は、たて穴住居のほか、お墓と考えられる穴など、多数の生活のあとが集中して見つかりました。また、その南側には貯蔵穴が広い範囲にわたって、確認されています。

南台地区は、前期後半 (およそ 5,700 年前) から後期の中ごろ (およそ 4,000 年前) まで、ほぼ継続して利用されていたと考えられています。なかでも、**中期の段階** (およそ 5,500～4,400 年前) の資料が最も多く、浦尻ムラの最盛期であることがわかりました。

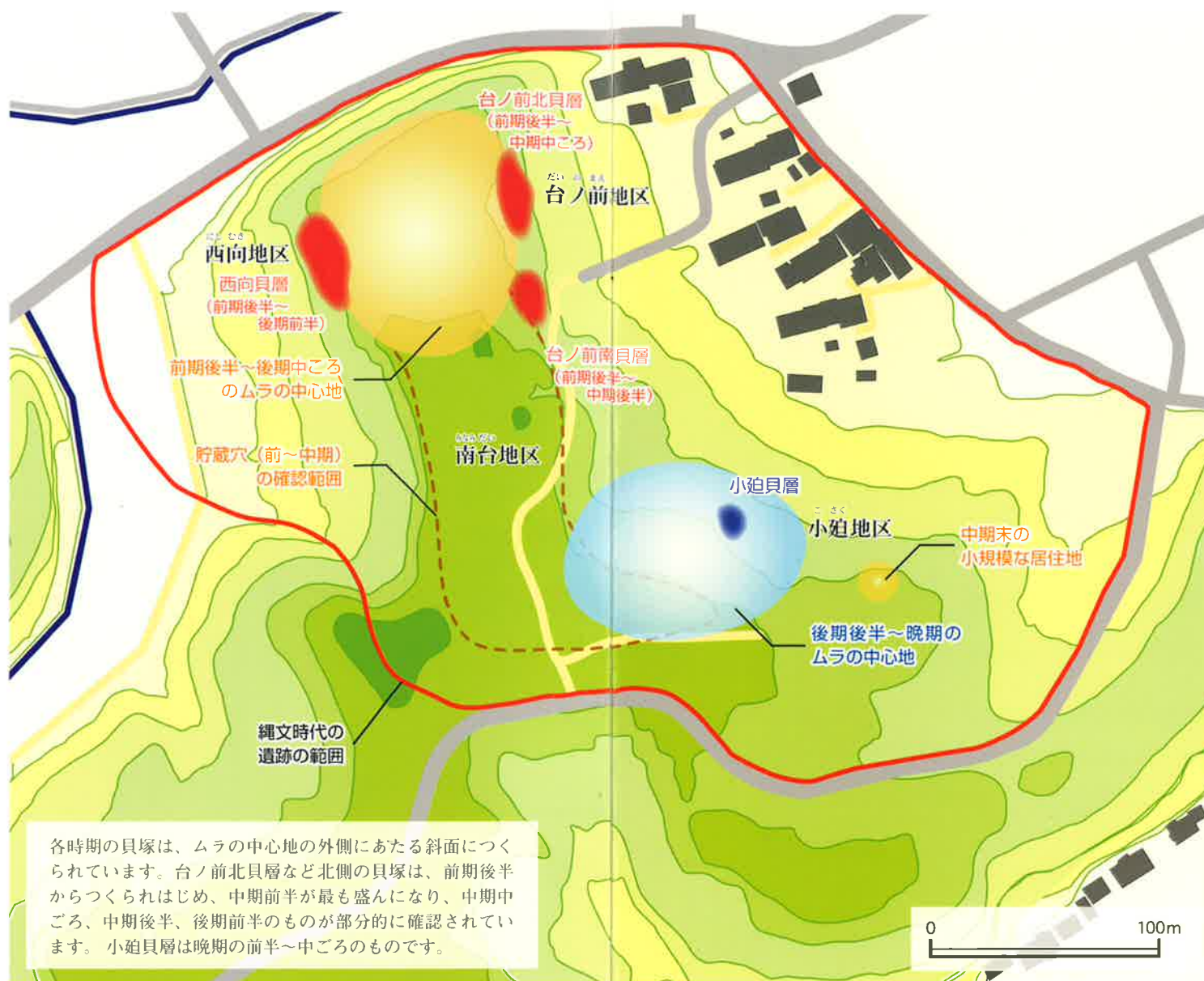
中期のムラ



たて穴住居
黄色い土を円形に掘りこんで、床をつくっています。中央よりに炉が設けられ、柱穴も掘られています。



石で組まれ、土器を埋めた炉 (複式炉)
土器の中には、木の実のアク抜きに使う灰や置き火として使う炭を入れていたと考えられています。



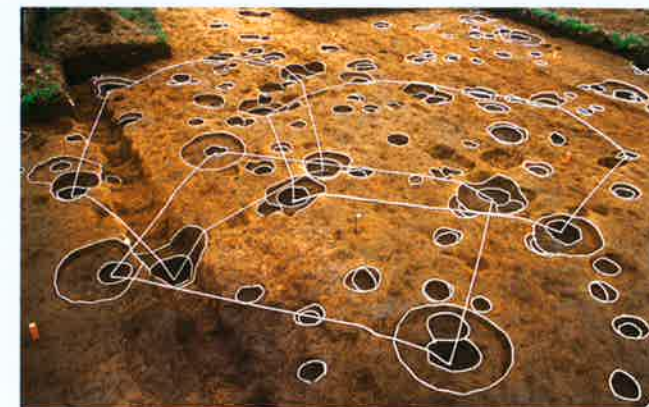
浦尻貝塚全体図

各時期の貝塚は、ムラの中心地の外側にあたる斜面につくられています。台ノ前北貝層など北側の貝塚は、前期後半からつくられはじめ、中期前半が最も盛んになり、中期中ごろ、中期後半、後期前半のものが部分的に確認されています。小迫貝層は晩期の前半～中ごろのものです。



木の実をたくわえる穴 (貯蔵穴)
直径1.7メートル、深さ1.6メートルの穴です。木の実をたくわえていたと考えられています。

晩期のムラ



多数の柱穴を見つけた状況
柱穴を四角形や六角形に組んだ建物だったと推定されています。建物が重なっていることから、同じ場所でも何回かの建てかえがあったことがわかります。



土器捨て場の状況
多量の土器が積み重なっています。

遺 跡の東南側にあたる小迫地区では、**後期後半～晩期** (およそ 3,000 年前ごろ) の柱穴が集中しているところが見つかりました。たて穴住居のような炉や地面を掘りくぼめてつくった床などは見つかりませんでしたが、その周囲からは生活に使った土器が多量に出てくる谷 (土器捨て場) などがあり、ここがムラの中心地であり、建物は住居であったと考えられています。浦尻貝塚の最終段階では、ムラの場所が移っただけではなく、住居の作り方も異なり、ムラの大きな変化が認められます。

浦尻貝塚調査のあゆみ

- 1901 大野延太郎、考古学雑誌に浦尻貝塚を紹介
- 1951 福島県学生考古学会調査
- 1970 福島大学学生考古学会調査
- 1971 「浦尻の台ノ前貝塚」「浦尻の西向貝塚」として小高町指定史跡に指定
- 1981 小迫貝塚新発見
- 1997 ほ場整備に伴う試掘調査
- 2000 道路建設に伴う試掘調査
- 2001 ～04 保存目的の範囲確認調査
- 2005 ～06 範囲確認再調査
- 2006 国指定史跡指定

貝塚のすがた

貝塚は、昔の人が食べた貝などの食べかすが積み重なったものです。日本の土は、一般的に酸性の土が多く、骨などを腐らせるのに対し、貝塚では貝のカルシウム成分が溶けだすことによって、土がアルカリ性になります。そのため、貝塚からは、貝や土器、石器などの道具が多く出土するだけでなく、普通の遺跡では残りにくい動物や魚の骨、シカの角でつくった道具などが出土します。いわば貝塚は昔の『タイムカプセル』とも言えるのです。

浦尻貝塚では、縄文時代前期後半から晩期中ごろ（およそ5,700～2,800年前）の各時期の貝塚が確認されています。前期から後期では、台ノ前地区や西向地区にて、幅15メートル前後、南北30メートル以上、厚さ最大1.8メートルにもおよぶ大規模な貝塚が3ヶ所確認されました。

晩期は、小迫地区の北側斜面で、12×10メートルの小規模な貝塚が1ヶ所確認できました。



台ノ前北貝層の断面

よく観察すると貝が多い層、土が多い層、土器が多い層があることがわかります。貝を多くとった時期、あまりとらなかった時期があったことを示しています。



台ノ前北貝層の確認状況

畑など最近の土を10センチ以上掘り下げると、貝塚が姿をあらわします。貝塚は、時期によって貝の種類や魚骨の量などが異なります。このことには、縄文人の生活ぶりや漁場などの自然環境の様相が反映されていると考えられます。



貝塚から出土したイノシシの下あごの骨とシカの角
台ノ前北貝層（5,300年前ころ）



土器とクジラの骨出土状況
小迫貝層（2,800年前ころ）

イノシシの骨やシカの角は、貝塚から、完全な形の土器と一緒に出土することがあります。また、これらの骨や角は部分的であっても、焼けた跡が認められるなど、特殊な状況を確認することができます。これらのことから、縄文人

は、単に骨や角を捨てたのではなく、特別な思いを込めて、貝塚に置いたとも考えられます。

このように、貝塚は、単に貝などの『ゴミ』を捨てる場所だけではなく、信仰の場所であったとも言えることができます。

貝塚の調査手順



① ていねいに掘り下げ、貝の種類や、炭の混じり具合、土の色の違いなどで分ける。



② 分けた層ごとに、すべての土をもらさず袋に入れて取り上げる。



③ 取り上げた土を網目の異なる網を通して水洗いする。



④ 網に残ったものを、室内で詳しく観察し、骨を選びだす。



⑤ 選びだした魚骨（ブリの背骨）

浦尻貝塚から見つかるもの

人 が生活をしていくためには、道具は欠かせないものです。縄文時代のムラからは、さまざまなものが見つかります。煮炊きに使う土器のほか、狩りやお祭りの道具など、いずれも縄文人にとって大事なものでした。



うらこちゃん
浦尻貝塚のイメージキャラクターです。右の土偶をモデルにつくられました。

道具は、身近な材料で作られています。鋭い刃が必要な矢じり、ナイフなどは主に石で作られます。



遮光器土偶

特徴的な大きな眼が、雪の反射をふせぐサングラス（遮光器）に似ていることからこの名がつけられました。

土偶は土で作られた人形で、女性を表現することが多く、安産や子孫の繁栄などを願ってつくられたものだと言われています。



耳飾りは耳に穴をあけて、今のピアスのように着けていました。

お

しゃれをする気持ちは、縄文時代からありました。左の首飾りに使われている石は、緑色凝灰岩という種類で、浜通り地方ではとることができません。薄い緑色をしていることなどから、縄文人にとって特別な思い入れがあり、遠くのムラから手に入れたものなのでしょう。



左 縄文土器（中期）
右 縄文土器の出土状況



左 2本ではさみ込んで使う刺突具（シカの角製）
右 刺突具の使用例



刺突具
左 鳥の骨製
中 シカの角製
右 シカの角製（逆刺し付き）



左 ヘラ（シカの骨製）
右上 牙斧（イノシシの牙製【外】）
右下 牙斧（イノシシの牙製【内】）



上 釣り針（シカの角製）
右 釣り針の使用例



矢じり
左・中 シカの骨製
右 シカの骨製

アクセサリー（垂飾品）
左列3点 サメの歯製
中列上 タヌキの牙製
中列下 ウのくちばし製
右 シカの角製
下段 イノシシの牙製



貝の腕飾り
左上 サトウガイ製
左下 サトウガイまたはアカガイ製
右 イタボガキ製



貝刃
左 ウバガイ製
右 ハマグリ製
貝殻の下側の縁に刃がつけられている。

シ

カの角や動物の骨などでつくった道具（骨角器）は、貝塚ならではの出土品です。材料はさまざま、捕らえた獲物を無駄なく利用していたことがよくわかります。

浦尻貝塚では、晩期の貝層（小畑貝層）から多くの骨角器が見つかり、縄文時代の終わり近くに、道具の大きな変化があったことがわかりました。



浦尻貝塚からわかる人と自然の関わり

気温の変化と海面の上昇

地球温暖化による海面の上昇ということを耳にしたことがあるでしょうか。この現象は、南極などにある氷が溶け、海の水が増えることによって、海面が上昇し、海が陸地側に広がることを言います。これは、地球の歴史の中で、長い期間をかけて、何度となく繰り返されてきたことですが、21世紀の今は、その急激な進行が社会問題となっています。

縄文前期の貝塚

日本列島の人類の歴史のなかで、最も気温が高かったのは、およそ7,000～6,000年前（縄文時代前期）でした。浦尻貝塚周辺でも、今の陸地部分に海が入り込んだと考えられ、このころの貝塚が多く確認されています。今の海岸線よりも4～5キロメートルも離れた宮田貝塚や片草貝塚の貝塚は、この近くまで入り込んだ海（内湾）があったことを示す証拠と言えます。

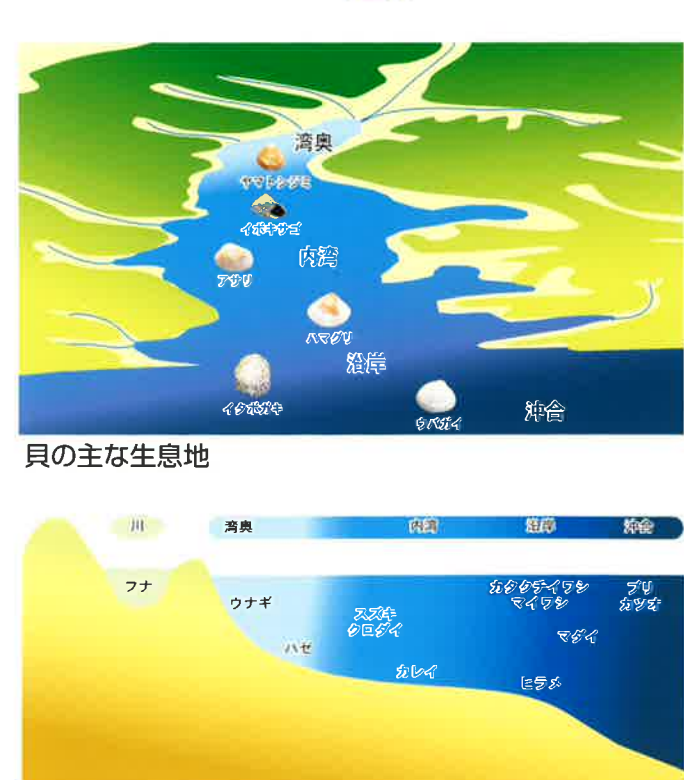
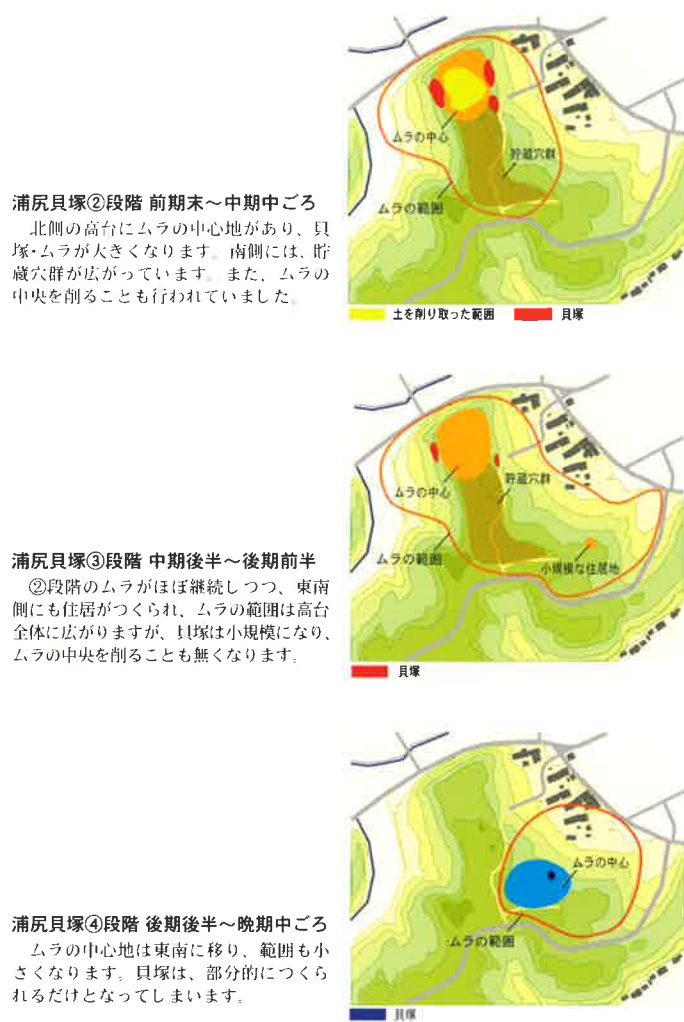
浦尻貝塚の移り変わり

浦尻貝塚は、内陸に貝塚がつくられなくなった、およそ5,700年前（前期後半）にムラが出現します（浦尻貝塚①段階）。その後、ムラはほぼ継続して3,000年近くにも及ぶ間営まれました。このような長い間継続した縄文ムラは大変珍しく、また貝塚・ムラの規模も大きいことなどから、浦尻貝塚はこの地域の中心的なムラであったと考えられています。そして、このムラは、範囲が広がる、貝塚が小さくなるなど、いくつかの移り変わりがあったこともわかりました。



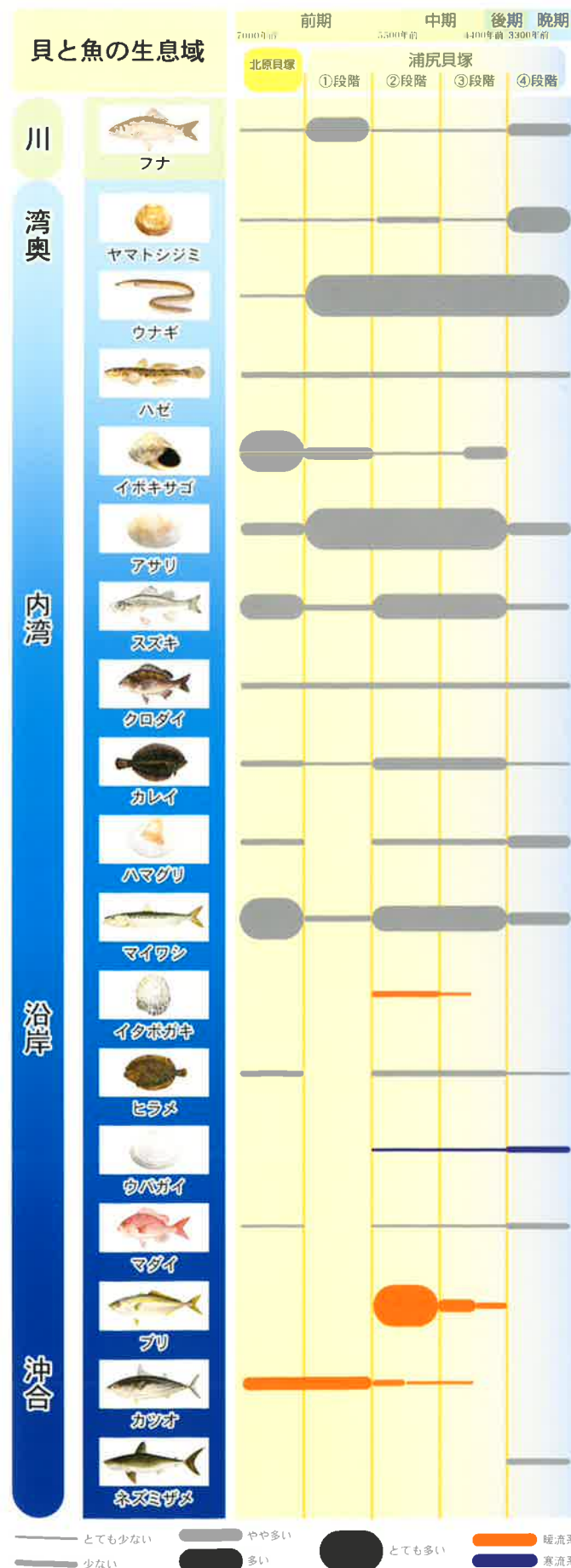
浦尻貝塚周辺の縄文遺跡

浦尻ムラの移り変わり



魚の主な生息地

縄文人がとる貝・魚の移り変わり



魚と貝からわかること

縄文人がとったさまざまな貝や魚は、種類によって生息しているところが異なります。このため、貝塚からでてくる貝や魚の量を調べると「縄文人の漁場はどのような環境だったのか」ということなどを知ることができます。

浦尻貝塚周辺では、浦尻貝塚を中心に、前～晩期（およそ6,500～2,800年前）までの各時期の貝塚資料が見つっています。これは、漁場の移り変わりなども知ることができる貴重なものであり、浦尻貝塚が特に重要とされる大きな要因でもあります。

浦尻縄文人の漁場

浦尻貝塚周辺では、後期後半（浦尻貝塚③段階）まで、主に内湾にいるアサリやスズキのほか、湾奥にいるウナギ、沖合から内湾まで回遊するマイワシなどがメインの獲物です。このことから、晩期以前は、主に太平洋に開けた内湾を広く利用していたと考えられます。

前期から晩期にかけてはだんだんと寒くなっていきます。湾奥にいるウナギは、最も暖かい時期の北原貝塚遺跡群ではあまり多くありませんが、浦尻貝塚が始まると増加します。このころ、海がやや退き、内湾に川の水が多く入ようになったためと考えられます。また、前～中期に多かった暖流系のカツオ、ブリはだんだんと減少し、海の変化をものがたります。

晩期（浦尻貝塚④段階）では、湾奥にいるヤマトシジミや川にいるフナなどが増加しており、内湾が浜堤によってふさがれ、川の水が多くなり、旧井田川浦の原形が形づくられていたことを示すといえるでしょう。

沖合にでる浦尻縄文人

川にいるフナなどが増加する晩期に、逆にマダイなど沿岸～沖合のものが、わずかながらも増えています。ほかに全長3メートルを超える「人食いザメ」であるネズミザメ科の骨も見られます。このことは海の変化とは関係しないことから、沖合への積極的な進出を可能とする漁業技術の変化、サメをとる人が尊敬されるといった文化の移り変わりがあったことをうかがわせます。

浦尻貝塚が伝えること

浦尻貝塚周辺では、このような水産資源の変化はムラの変化と同時に起こっています。浦尻貝塚の開始やムラの中心地の移動があったとき、出土する貝や魚の種類や量が変わっているのです。このことは縄文人のくらしが自然と強く結びついていたことをあらわしています。環境問題が叫ばれている昨今、このような人と自然との関わりは、浦尻貝塚が現代の私たちに伝えるメッセージなのかもしれません。

《引用・参考文献》
 原色日本魚類図鑑 1955 保育社
 続原色日本魚類図鑑 1981 保育社
 考古学と動物学 1999 同成社
 浦尻貝塚1 2005 小高町教育委員会
 浦尻貝塚2 2006 南相馬市教育委員会
 おだかの歴史入門 2006 南相馬市教育委員会

《協力》
 文化庁、福島県教育委員会
 浦尻貝塚調査指導委員会
 浦尻行政区、浦尻貝塚地権者会
 東北電力株式会社

編集発行 南相馬市教育委員会
 〒975-0012
 南相馬市原町区三島町二丁目45
 TEL 0244-24-5284
 FAX 0244-23-7782
 印刷 株式会社まづき印刷



